

異世代間交流を目的とした防災リスクコミュニケーションの実践

岩手県立大学総合政策学部 ○井上かほり 田中みなみ 伊藤英之 宇佐美誠史
 慶應義塾大学商学部 吉川肇子
 釜石市市民生活部 佐々木亨

1. はじめに

筆者らは、釜石市と共同で、防災体制の整備及び地域住民の防災に関する意識向上を目的として、「地域のつながり」再生による防災まちづくりプロジェクトを展開している。その一環として、地域住民と中学生の交流、防災情報の共有を目的とし、防災リスクコミュニケーションを実施している。本報告では、釜石市立大平中学校と地域住民との世代間交流を目的とした防災リスクコミュニケーションの実践について報告する。

2. 中学生への防災リスクコミュニケーションの意義

釜石市は、複雑な地形条件により、津波や土砂災害の発生リスクの高い地域である。H14年7月11日には、台風6号により発生した土砂災害で、死者2名を出す被害を受けた。津波については、片田ら(2006)によって、一連の津波防災教育が行われているが、土砂災害に関しては行われていなかった。従って本研究では、土砂災害に対する防災教育を行うことを目的とした。今回防災リスクコミュニケーションを実施した釜石市立大平中学校は、学区内に多くの土砂災害危険区域が含まれており、土砂災害の発生の可能性が高い場所である。本報告では、その内容や成果について報告する。

3. 中学生への防災リスクコミュニケーション

本研究の目的は二つある。まず中学生に土砂災害についての正しい知識を身につけてもらい、自分の住む地域の土砂災害の潜在的ポテンシャルを把握すること。二つめは、防災教育を通して、地域の住民と中学生に交流をもってもらうことである。筆者らは釜石市の大平中学校の3年生63人を対象として、3回にわたり以下のようなリスクコミュニケーションを行った。その際、地域の住民の方々に参加してもらっている。

(1)2010年6月10日 中学生と地域住民合同クロスロード体験会(中学生:42人 地域:15人)

クロスロード(矢守ら2005)を用いて中学生と地域住民との交流会を行った。この際用いたクロスロードは、松原用に作成したオリジナル(後藤ら本予稿集)を使用した。

(2)2010年9月8日 中学生への防災教室

H14年に釜石市松原町で起きた土砂災害の理解を深めるため、被災者の体験談を聞く機会を設けた。その際、土石流に対する理解を促進させるため、岩手県立大学の教員が説明も行った。

(3)2010年10月7日 釜石市大平中学校総合学習 思いやり支援マップ作成

地域の土砂災害危険箇所の把握と避難行動時の問題箇所の抽出を目的として「思いやり支援マップ」の作成を地域住民と一緒にを行った。(写真一1)その際、一部の生徒には高齢者・車椅子体験を実施し、避難時要援護者の体験をしてもらった。(写真一2)また、作成したマップは学校祭で展示して、広く地域住民に見ても



写真一1 支援マップ作成状況



写真一2 高齢者体験の様子

らった。

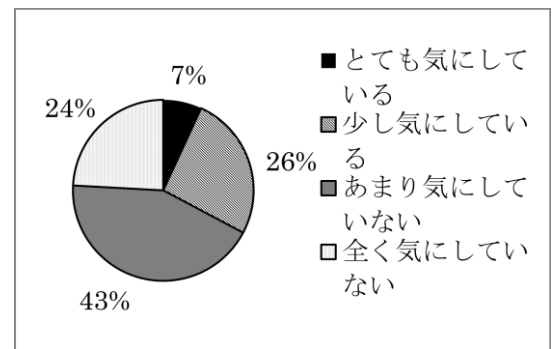
4. アンケート結果

第三回目の授業の際、授業の前後でアンケートをとり、災害時要援護者に対する意識の変化と、自分が暮らしている地域の危険箇所の認識について把握した。なお、生徒 63 人にアンケートを実施し、回収率は 100%であった。図一 1 に授業前の時点で災害時の危険箇所を普段から気にしているかどうかを示す。図一 1 より、授業前は普段から地域の土砂災害の危険箇所について、とても気にしている人が 7%しかいなかった。図一 2 に授業を通して災害時の危険箇所を知ることができたかどうかを示す。授業後は、地域の土砂災害の危険箇所をよく知ることができた人が 68%に増加した。具体的な感想としては、「自分の住んでいる地区に危険な場所がたくさんあって驚いた。」「いつもは気にならない場所でも、ちゃんと探せば危険な所があったので注意したい。」「初めて見たことや、聞いたことがたくさんあり、とてもためになった。何も考えずに暮らしていたが、松原には土砂災害の危険があることがわかって良かった。」等、地域の危険箇所の再認識に関する意見が多く存在した。

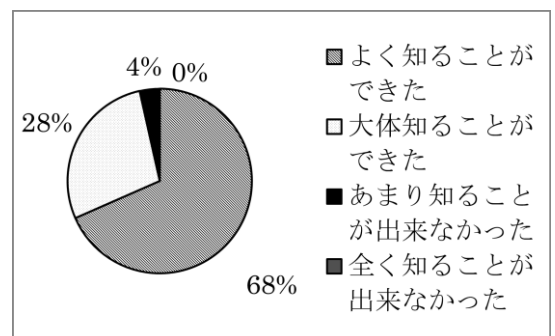
また、事前と事後のアンケートに同じ質問項目を設け、災害時要援護者の避難に対する意識の変化を比較した。図一 3 に災害時要援護者の避難に対する意識の変化を示す。「お年寄りはあるあなたと同じように、災害が起こった時に自分で歩いて避難場所へ移動できると思うか」という質問に対し、「そう思う」が 7%から 2%、「どちらかといえばそう思う」が 20%から 5%と減少し、「あまりそう思わない」が 52%から 63%、「そう思わない」が 21%から 30%とやや増加傾向が見られる高齢者・車椅子体験を通して、災害時要援護者の目線に沿って避難についての理解を深めることができ、疑似体験を実施したことは効果的であった。具体的な感想として「自分がいつもなんの不便もなく歩いていた場所が、障害のある人にとってはかなり大変だと思った。いつもより倍の時間がかかってしまったのは驚いた。」「お年寄りは歩くだけでも大変なのに、避難するのは本当に大変だと思った。」といった避難時の大変さが良く理解できた等の意見が多く存在した。

5. まとめ

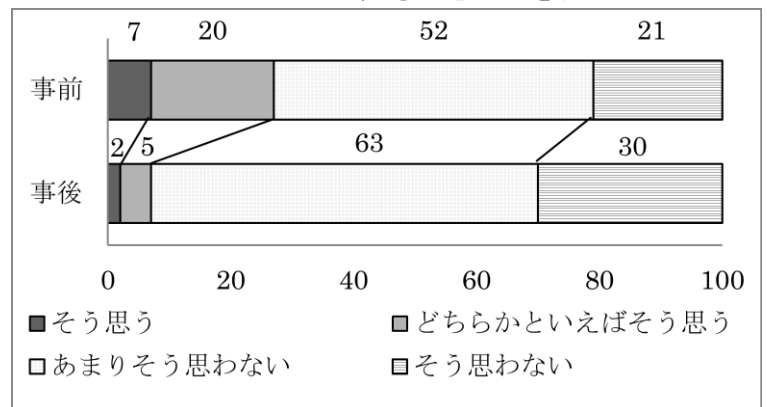
本研究を通して、複数のリスクコミュニケーション手法を併用して、マップの作成をすることと、さらにマップ作成のみではなく高齢者・車椅子体験を併せて行うことは有効であった。一連の学習を行うことで地域の防災力に寄与することができた。これらを踏まえ、異世代間交流による地域の防災力向上や、次世代防災リーダーの育成に資することができるよう、今後も継続していきたい。



図一 1 災害時の危険箇所を気にしている



図一 2 災害時の危険箇所を知ることができたか



図一 3 お年寄りは災害時に自分で歩いて避難できるか